

リクドローは剣の神に相応しい、一振りの銘刀を髣髴させる体つきをしていた。

あたかも鍛え抜かれた玉鋼の如く、それでいて粘りを持つかのようにしなやかで、完璧に均整のとれた、その体軀。

無駄なものは一切なく、無論のこと芸術的な美しさを湛える。

顔だけ見れば、十代半ばの少年のようなのに。

神でもなければ、これほど戦士として極まった肉体を、人が十代のうちに手に入れるのは不可能であろう。

ベッドの上にさらされたリクドローの裸身を、寝顔を——彼女はすぐ隣でひたと見つめ続ける。名画を観賞するように。

それでいて、情愛と情欲に濡れた眼差しで。

何より、記憶に焼きつけようとするかのような真剣さで。

彼女もまた美しく、妙齢の女にしか出せない色気をたっぷりと備えていたが、やはり神と比べてしまうとどこか落ちる。瑕瑾がある。

そのことを誰だれよりも彼女は自覚している。

自嘲の苦笑いで、気分を紛らわす術すべにも慣れた。

そうして、リクドーにしなだれかかる。

彼女もまた裸身であった。

肌と肌をしっかりと重ねて、さらにリクドーの逞たくましい胸板を愛撫あいぶする。

この男神に仕え、身も心も捧たくげ、長い間を連れ添ってきた。どんな風にしてやれば悦よろこぶかは、知り尽くしている。

「ん……っ」

堪たまらずリクドーが吐息を漏らした。

穏やかに閉じていた瞼まぶたが震えだす。

目覚めの合図だ。

リクドーはゆつくりと、瞼を開いた。

寝惚ねぼけ眼が焦点を結び、やがて視界がくつきりとなる。

すぐ間近で寝顔を覗のぞき込んでいた、彼女の美貌に気づく。

半分は伸ばした前髪に隠れているけど、それがまた大変に色っぽい。

「おはよう、ヘルガ」

名を呼んで、もつとしっかりと抱き寄せる。

彼女の温もりや肌触りの艶やかさ、肢体の柔らかさがより一層に感じられる。

すると彼女もまたうれしそうに、形の良い唇を寄せてきて、ささやいた。

「おはよ、リクドー」

彼女の吐息で耳たぶを、声音で鼓膜をくすぐられ、リクドーはゾクツとさせられる。

しかもヘルガは、追いつきのようにキスをしてくる。軽く短くついはむように、戯れるよ

うに、最初はリクドーの鼻頭へ、次いで額、両の頬——最後は唇。

くすぐりたいけど、気持ちいい。

リクドーは倍にしてやり返す。

ヘルガが堪らぬ様子で、嬌声混じりに笑い出す。

「やめて、私、そんなにやっつけないわよっ」

「俺の寝顔を眺めてたろう？ 悪い趣味だぜ。これはその分もコミだ」

「悪いのはリクドーよ。とつても可愛い寝顔をしてるんだもの。見入っちゃうわ」

唇や舌を使って交互にくすぐり合い、じゃれ合いながら、睦言を交わす。

「俺みたいなオッサンに向かって、可愛いはないだろ？」

「でもホントのことでしょ？」

ヘルガはからかうように笑いながら、リクドールの顔をつついた。

十代も半ばの少年にしか見えない、童顔だ。

「あなたが数千年も生きてる最古の神のひとりだなんて、未だに信じられないわ」

「神の中じゃあ、生まれた時からジイサンの姿をした奴もいるし、俺はこの姿で生まれた」

こんなものは見た目のことでしかない。

実際、リクドールが浮かべる表情は若者にはありえない、くたびれた中年オヤジのように^{けだる}るげなものだ（そしてだからこそ、安らかな寝顔が可愛く見えるのだろう）。

「基本、俺たちの肉体はそのままずっと不変なんだよ。精神と違って」

付け加えれば、精神年齢の成長速度には個神差がある。

「ええ、神様つてのはそういうものだって、会ったその日に教えてくれたわよね」

「だったっけか？ さすがに憶えてないな」

彼女のおでこに額をこすりつけるリクドール。

ヘルガと出会ったのもう十五年も前のこと。

類稀な^{たくいまれ}霊力^{アウラ}の持ち主だった少女が、ヴェステル火山の巫女^{みこ}として見いだされ、彼と契りを結んだ。

というだけではなく、性格的にも馬が合った。

ヘルガは竹を割ったような人柄だが、押しつけがましいところは微塵みじんもない女で、一緒にいて楽しさや温かみを感じることはあっても、何か気に障さわるといふことが一度たりとなかった。ケンカなんて数えるほどしかなかった。

男女の仲とか神と巫女の関係性だとか、そんなもの以前に、ひとりひとりとしての互いに尊敬し合える間柄だった。

リクドーも多くの巫女と契ちぎってきたが、ヘルガほどのパートナーはいなかったし、最も多くの愛情を注そそいだ相手であった。

と——そんなヘルガが、なぜ今さら神の外見が不変であることや、十五年も前の話を蒸し返すのだろうか？

(変な奴やつだな)

リクドーはおかしくなつて、どう擲や擲ゆしてやろうかと考えた。

しかし、ヘルガに機先を制される。

「知ってる？ 今日、私の誕生日なのよ」

そう言つてヘルガは、頬に頬を寄せてくる。

「もちろん。ちゃあんとプレゼントも用意してあるぜ？」

リクドーはその柔らかさを堪能しつつ、自分も頬でこすり返した。

気持ちいいだけでなく、心安らぐスキンシップ。

彼女の顔が見えなくなるのだけがネックだが、頓着なしに続ける。

「前に一回忘れた、あん時だけはこっぴどく拗ねられたからなあ。誕生日は忘れないよう肝に銘じているんだ。モノグサのこの俺がだぜ？ ぜひ光栄に思つて欲しいね」

そんな風に冗談めかすリクドー。

てつきり彼女もクスリとしてくれると思つたのに、ヘルガは笑わなかつた。

それどころか――

「私、今日で三十歳なのよ」

彼女の声に、急に、湿り気が混じつた。

リクドーはぎよつとなるしかない。

どうしたのかとヘルガの顔色を窺おうとしたが、頬と頬を合わせた格好のまま、彼女がほとんどしがみつくように強く抱きついてきたから、それもできない。

「……だつたっけか？ ……それも憶えてないな」

「嘘つき。でもリクドーのそういう、優しい嘘が大好きだつたわ」

ぐしゅつ、とヘルガが鼻を鳴らした。

声に混じる水音は留まるところを知らなかつた。

「……いやいや……嘘じゃねえつてば、ハハ……。美人さんは若く見える……。からな。……。全

然、気づかなかつたな……ウン」

ヘルガの急な態度や妙な台詞に、たじたじにさせられつつリクドーは、つかえづつかえ言葉を絞り出す。

「でもね、もう、立派なオバサンよ」

「オッサンの俺と……釣り合いがとれてるってもんだな……ハハハッ」

……なんだか愁嘆場しゆうたんばじみてきたように思えるのは、気のせいだろうか？

「私ね、決めてたのよ。三十になったら巫女を辞めて、あなたの元から去るって」

「おお……神よ……」

「ふふつ。神様はあなたでしょ？」

ヘルガはやつと噴き出してくれたが、その笑い声すらもうずぶ濡れだった。

くつついた二人の頬の間からは、既に涙が滲み出ている。

(気のせいじゃねえじゃんか。ガチもんの愁嘆場じゃねえか)

どうしてこうなった。

リクドーは頭を抱える衝動を堪えた。そっちを抱えれば、ヘルガから手を離すことになってしまふ。

ヘルガも頬をびったりとくつつけたまま、表情を決して見せようとはしなかった。

「……冗談だよな、ヘルガ？」

「私、こんなことを冗談で言うほど、いやな女のつもりはないわ」

「考え直してくれるよな？」

「ずっと前から、何度も考えたわ。でもやつぱり、決心は変わらなかった」

「どうして……」

何が彼女にそれほど決断をさせたのか。

ヘルガは訥々と答えてくれた。

「あなたはこれからも永遠に、若い姿のまま生き続ける。でも、私はもうこれから老いる一方よ。年寄りになっていく姿を見せたくない。美しいままの私であなたの記憶に残りたいの」

「そんな……悲しいこと、言ってくれるなよ……」

リクドーは懇願した。

だが、ヘルガは返事をしてくれなかった。

返事をくれないから、リクドーも会話を続けることができない。

(……そんなもん気にするなよ。……おまえはいくつになっても美しいよ)

言葉を言いかけ、呑み込み、また何かを言いかけ、呑み込むことしかできない。

どんなに嘘偽りのない台詞や気持ちでも、ヘルガはただの慰めと受けとるだろうからだ。

肚を決めるしかなかった。

少年みたいな外見をしていようが、オッサンみたいな中身をしていようが、リクドーは男な

のだ。そこに神も人もない。

「顔を見せてくれよ、ヘルガ」

彼女はしばし躊躇ちゆうちよしていたが、やがて、くつつけていた頬を離した。

ぐしゃぐしゃに泣き濡れた顔がそこにあった。

リクドローはそつと、ヘルガの顔へ半分かかった前髪をかきわける。

露あわになつた彼女の美貌全部を、目に焼き付ける。

そう、彼女は美しかった。

若々しかった。二十五と言つても誰も疑わないし、二十歳と言つてもぎりぎり通るはずだ。歳とのことなど気に病む必要もないのに……それはあくまで男の理屈でしかないのか？

「おまえのことは忘れないよ。永遠に」

「……ありがとう。……大好き」

ヘルガがもう一度しがみついてきた。

「私もあなたのこと一生、忘れない。でも、巫女を辞めたら結婚相手を探すつもりよ」

ひどいことを言っているようで、リクドローを気に病ませないようという、ヘルガの心遣いを感じられる台詞だった。そんなよそらの小娘にはできない台詞だった。

なんて佳いい女なのだろうか！

「おまえなら、俺なんかよりもっといい男を捕まえられるよ」



口では別れの言葉を告げつつ、腕は未練のままにヘルガの体を強く抱き締めた。「ふふっ。それは難しいと思うけれど……がんばるわ」

ヘルガも最後にもう一度だけ、笑顔を見せてくれた。

涙に彩られた、かくも綺麗なものが存在するのかと感嘆するほど、印象的な泣き笑いだった。

十

神々から、星の心臓とも呼ばれる、ヴェステル火山。

その最高峰を中心に、東西へと斜めに連なる同名の山脈。

さらにそのお膝元には、同名の町がある。

南大陸でも一番の温泉街だ。

実際、大陸中から遙々、観光客がやってきて、湯治客が長滞在する。

夢見心地と評判の名湯や、万病に効くという伝説の秘湯を求めて、他大陸からカカフタフ地峡を渡ってくる者まで存在する。

亜人の姿だつて、この温泉街では珍しくない。

発情期らしい犬人間のカップルが土産屋の前で人目も憚らずにイチヤつき、猫人間の親子連れが名物の黒たまごを仲良く食べ歩いている。その子どもたちのお尻から伸びた尻尾が、ゆ

らりゆらりと戯れる様に、可愛いものに目がない町娘たちの視線が釘付けになる。

ぬめつとした鱗うろこを持つ蜥蜴人間リザードマンや、皮膚を持つ蛙人間フオジャイは、湯上がりのまま水を滴したたらせて平気で歩くので、町人には不評だ。

隠れ里からほとんど出てこないことで知られる、妖精たちの姿すらこの温泉街では散見できる。彼らは人間たちと外見のな違いはほとんどない。ただ、ハツとするほどの美形揃いだし、珍しい髪や肌の色をしている。精悍せいこんな赤銅色の肌をした山妖精オレアード。真っ青な髪を持つ水妖精ナイアズに、深みのある緑髪ドライアドの木妖精。かしましい谷妖精ナバイアの娘たちは目に鮮やかなピンク色の髪をしていた。

リクドールの愛するホームタウンはそんな、あらゆる人種ミューズが集い、娯楽と歓楽と享楽の坩堝るつぼと化した場所だった。

今、彼がいる酒場もそうだ。

入口に近い席では、五人がかりで熊人間アルトスの偉丈夫と呑み比べをしている。金がかかっているのか、相当の盛り上がりだった。

夜には娼婦にもなる給仕娘たちの中には、牛人間タウロスのすこぶるつきの美女がいて、男二人がどちらが客になるかで口論する一幕も。彼女のぱつつんぱつつんのスタイルもさることながら、巫人の娼婦わいざうというのはよそではとても珍しいから、どちらも簡単には譲らない。

そんな猥雑わいざうさが、リクドールには心地よい。

取り澄ました感じのコジヤレた酒場も嫌いじゃないが、やはり真つ昼間からのんべんだらりと呑むには、こういう店に限る。

町の住民たちも勝手知ったるなんとやらで、リクド一の顔に気づいても、

「おい、神サンがまた来てるぜ」

「相変わらずヒマそうなツラしてんなあ」

「よっしゃ。一丁、オレらが相手してやつか」

みたいな調子でやってきて、一緒に酌くみ交わすことも多い。

リクド一が他の神々とは違って威厳もなく、ただのグータラだというのは知れ渡っている。

町人の中には、リクド一が「剣の神」ではなくて、「昼行燈ひるあんどんの神」だと本気で勘違いしている者もいるくらいだ。

それにリクド一は今まで一度も、民に何か無体を強いたこともないし、むしろ彼らの好きにやらせている。

だからか、神様なのにまるで畏おそれられていなかっただし、どちらかというところ人気があった。信仰とか崇拜とか、そんないいものじゃない。こういう歓楽街だと益やくたい体もない遊び人が、粹いきだなんだと持て囃はやされる、あれに近いノリだ。

今日なんてもうひどい扱あいだった。

「ヘルガちゃんにフラれたからってシヨボくれんなよ、神サン！」

「おれつちが一杯奢つてやつからよ！」

「オレらあ、モテない男には優しいからな、ガハハハ！」

なんて具合に、春の陽気に誘われた、昼間から赤ら顔の呑兵衛どもに、今朝の悲劇を酒の肴さかなにされる始末である。

「フラれたんじゃねえよ。別れの時が来ただけだよ」

リクドーも唇を尖らせて抗議するが、酔っ払いにクダを巻かれた程度で怒ったりはしない。神様なのに彼らの奢り酒を恵んでもらっては、チビチビと不景気にやっている。

（いや、ホント、こいつらが気のいい奴らだつてのはわかっているし、こうやって大騒ぎして、実は慰めてくれるつてのはわかつてんだよ？ こいつらはいいんだよ？）

エールを湛えた木製ジョッキを舐めながら、リクドーはテーブルの対面にジト目を向ける。

「ギヤツハハツ！ 格好つけたつて、ヤケ酒やつてりや世話ないぜ、リクドー様」

「ヘルガは優しかったから、リクドー様に愛想尽きたつて、本当のこと黙つてただけよ」

遠慮のかけらもなく失笑と冷笑をしてくれる、若い男女の二人組。

この底抜けに陽気な男の方は、名をギリオン・フェクダという。

眉根まゆねを結べばさぞや精悍だろう顔つきだが、屈託くつたくのない笑顔のおかげでいい塩梅あんばいに角がとれている。満腹でお昼寝中の獅子を髣髴させる。

冷やかな態度の女の方は、ネイ・メラク。美人は美人だが、無愛想だし、まさに他者を寄

せつけない類の美しさだ。口を開けば毒しか吐かないし、たまにニッコリしたかと思えば嘲笑一歩手前の冷笑という、せつかくの美貌を持ち腐れにする天才。

二人とも先ほどからずっと、火を近づけたら引火するほど強い酒を、大ジョッキでガブ飲みしていた。酒豪だとかウワバミだとか、そういう次元の話ではない。常人だったらとつくにぶっ倒れている。

そう、つまりは彼らは只人^{ただひと}ではなく、超常の存在だということ。

せいぜい二十歳ちよつとの外見に、だまされてはいけない。千年以上もリクドーに仕える眷属^{ガイズ}であり、七人いる騎士^{パラスイーン}のうち二人だった。

「おまえら、仮にもご主神様^{しゅじん}に対して、いたわりの気持ちとかつてねえわけ？」

リクドーはジト目のまま、ギリオンとネイに問い質す^{ただ}。

神と眷属^{ガイズ}といえは、普通は王と側近などよりも強固で絶対的な関係で結ばれ、普通は神に対して反抗的な眷属^{ガイズ}もないし、普通は生意気な口を叩く眷属^{ガイズ}だっていないのだが——

「いたわる気あるって！ だからこうしてヤケ酒につき合ってあげてんじゃんよー？」

「だからフラれてねえしヤケ酒じゃねえっつ」

「いたわって欲しがる前に、自分はヘルガをいたわってあげたのか、胸に手を当ててみたら？」

「メッチャ大事にしてただろがっ、人をゴクツブシ亭主みたいに言うんじゃねえっつ」

左右ほぼ同時に大声でツッコまさせられて、リクドーは肩で息をする。

ヨソの子の眷属たちと、ウチの子の眷属たちは違うんだって、痛感させられる。

がっくりと肩を落としていると、ウチの子たちはさらに調子に乗って、

「強がんよ、リクドロー様あ。今日は愚痴でも泣き言でも、一晩中だつて聞いてやつからよお」
「昨日、ヘルガが淹れてくれた紅茶に、美味しいって褒めてあげなかつたことは憶えてないの？ 一昨日にヘルガと買い物に行つて、荷物を十分の一も持たせたことは？ そうというのが積もり積もつて、女に愛想尽かされるわけ。三日前にも——」

右隣にやつてきたギリオンが強引に肩を組んできて、左隣に移動したネイがねちねちと言つてきて——要するにどっちも絡み酒以外の何ものでもなく、リクドローは懽然顔になる。

「俺は忠実な眷属を持った、幸せモンだよ……」
ほやし節でまたチビりとエールを舐める。

この顔がそんなにおかしかったのか、周囲の酔っ払いどもの爆笑を誘つた。
一人が腹を抱えながら、

「で、でもよお、巫女様が不在つてなつたら、このヴェステルはどうなんだい？」
また一人が目尻の涙を拭いながら、

「神サンだつて、なんか困つたりするんじゃないかい？」
さらに一人がまだヒーヒー苦しそうにしながら、

「バーカ！ リクドロー様は 大戦 にゃあ興味ねんだから、関係ねーよ！」

などと好き勝手に言ってくる。

(ホント、ありがてえ奴らだぜ……)

リクドーは大きく嘆息すると、ギリオンを振りほどいて席を立った。

「あん？ どこ行くんだい、神サン？」

「おまえらのおかげで、やらなきゃいけないことを思い出したんだよ。あんがとな」

皆に軽く手を振りながら、酒場を後にするリクドー。

本当は忘れてなどいなかった。

ただ、自分でもどうにもふんぎりをつけられずに、グダグダしてただけで。

「ヴェステルの巫女がいなきゃあ、困るんだ。俺だつてな」

タイクーン――

地上の人々は、この世界の名をそう呼んだ。

そして天より降臨した神々が、この世界を戦場に変えた。

百柱を超える彼らが、世界に点在する数百か所の《龍脈》を巡って争い、奪い合い、百年もの永きに亘って、大戦を続けている。

《龍脈》とは、大地の力の溢れ出る特異点である。

例えば、雲を衝く巨大な山。

例えば、神秘的な輝きを湛える湖。

例えば、嵐の晴れぬ荒野。

神々はそういった土地土地からエネルギーを汲み上げ、彼らが持つ超常の力をさらに高めることができるのだ。全ての《龍脈》を領有することができれば、この世界を支配したと言っても決して過言ではないだろう。

多くの神々が覇者たらんと目指し、そしてライバルたちに打ち勝ち、より多くの《龍脈》を得て、より強大な神となっていく。

多くの神々が覇者たらんと目指し、しかしライバルたちに敗れ、力を失って天へと還り、あるいは従属神として生き永らえることを選んだ。

リクドローは後者だった。

十大《龍脈》の一つに数えられるヴェステル火山を領有していながら、最古の神の一柱でありながら、戦いを本分とする剣の神でありながら——負けたのだ。

それも、大戦が始まって早々に、覇権争いから敗退していた。

相手は、同じく古い神であるオードラン。

リクドローは彼の軍門に下った、従属神という立場となった。

ヴェステル火山こそ奪われずにすんだが、それだってオードランが雨の神であり、彼の靈力

とは馴染なじまない《龍脈》だったから、お目こぼしをされたにすぎない。

代わりにリクドローは、ヴェステル火山を管理し、他の神々に奪われぬよう守護せよと、オードランに命じられていた。

やる気の出ないこと甚はなはだしい命令だった。

なにしろオードランは一大勢力を築く強力な神で、ケンカを売ろうとする神などそうそうはいない。別にリクドローが躍起になって守衛役を果たさずとも、ヴェステル火山にちよつかいをかけてくる神は、ひとりもいなかったのである。

「まあ、俺ももうガツガツいきたいほど若くはないし、万々歳さ」

と、リクドローはうそぶくばかりであった。

おかげで「食う」「寝る」「遊ぶ」のグータラとした毎日を、面白おもしろおかしく謳歌おんがしていた。

しかし、守る必要がないことと、端はなから守ろうともしないことは、似ているようで全く違う。

やる気が出ずとも、やっているふりは最低限しなければいけないのだ、リクドローは。

さもなければ、オードランに咎とがめられるという理屈だ。

そして、その最低限をするためにも、巫女が必要となる理由があった。

神々は《龍脈》から直接、大地の力——地素ガイア——を引き出すことはできない。

《龍脈》が選んだ巫女を媒介とし、彼女らと契ることで初めて、その強大な力を行使できる。

ゆえに《龍脈》一つにつき、一人の巫女を据えなくては、領有する意味がないのだ。

今朝までは、ヘルガがヴェステル火山の巫女だった。

今日からは、新たな巫女を迎えなくてはリクドローの力は激減する。

自分は《龍脈》をあと二つ有していたが、そこから得られる地素ガイアは、十大《龍脈》の一角であるヴェステル火山のものと比べて、遠く及ばないからだ。

温泉街の郊外、よりヴェステル火山に近い麓に、同名の神殿がある。

白大理石がふんだんに使われている、神々しくもどこか瀟洒しょうしやな建物だ。

さほどない石段を上がると、広い玄関口に着く。

そこで、老紳士がリクドローを待っていた。

「お帰りなさいませ、我が主あるじ」

と、どこか洒脱しゅだつな所作で一礼する。

白シャツの上に、黒ベストを小粋に着こなしたこの老人は、名をカロン・ドゥーベという。

今は白木作りの弓と、白羽の矢を携えていた。

「ずっと俺を待ってたのか？」

「いえいえ、そろそろお帰りになる頃ころ合いだと思ひまして」

カロンは茶目つ気たつぷりにウインクしてみせた。

彼もまたリクドールの眷属だが、七人いる騎士たちの中でも、最も古くからのつき合いだ。

こちらの思考パターンを本当に読んだのかもしれないし、あるいは実はずっと帰りを待っていてくれたのかもしれないし、どちらにせよ真実を悟らせないだけの円熟味があった。

「どうぞ、リクドール様。ご用意いたしておりました」

「ん。助かる」

カロンが洗練された丁寧さで弓矢を差し出し、リクドールはぞんざいに受けとった。

弓は霊木から作った、玄妙な拵えのもの。

矢は時間をかけてこの地の力に馴染ませた、白羽の矢。

リクドールはすぐ矢を番えず、弦を引っ張って、何度も具合を確かめる。

「随分とご慎重ですな？」

「何しろ使うのは十五年ぶりだからな」

この弓矢の一式は、新たな巫女を選定する儀式のために用いるものだ。

弦を引く腕力ではなく、靈力で矢を飛ばす。技倆で当てるのではなく、鏃に込められた地素

が、人並み外れた靈力を持つ乙女を、自動的に捜し出す。

だから、弦の具合など大して意味もないのだが、リクドールは引いては離してと、弄び続ける。

「リクドール様ほどの古神ともあろう御方が、なんとも未練がましくいらっしやることですなあ」

カロンが慇懃にすぎてもはや無礼な口調で言いやがった。

さすが長年仕えているだけあって、リクドローの心情など簡単に読み当てる。

次の巫女が選ばれば、《龍脈》はもう過去の巫女と霊的に繋がることはない。

つまりはこの矢を射放てば、ヘルガは本当にお役御免となるのだ。

永い神の生の間で、リクドローは何度となく選定の儀式をやらされた。人間である巫女は定命の生き物で、いつかは絶対に別れの日が来るのだ。それは致し方ないことだ。そう頭ではわかっているのだ。頭では。

「俺はさ、ヘルガと色々沙汰をやりたかったわけじゃないんだよ。それこそあいつが、他に好きな男ができたから、巫女を辞めたいって言い出したなら、大手を振って送ってやれたんだ。

でも、そうじゃなかった。老いる様を俺に見せたくないってさあ……っ。俺は、見たかったよ。あいつがオバサンになって、オバアチャンになって、ずっと大事にしてやりたかったよ」

「仕方ないでしょう。ヘルガ様が望んでいたのは、あなた様との惚れた腫れたなのですから」
カロンがそんな自明の理をほじくり返すのかとばかり、呆れ口調で言った。

リクドローは詠嘆する。

「友達にも家族にも、なれなかったんだなあ……」

そして頭を振り、愚痴はこれっきりにする。

こんな泣き言をこぼせるのは、眷属カニスの中でもカロンだけだ。

「悪かったな、カロン」

「ええ。いいお歳としを召まされているのですから、切り替えくらいちやっちゃとなさってください」

「うるせえ、ジジイに言われたくないよ」

「わたくしは生まれた時からこの姿です。ジジイと仰おつしやるならリクドー様の方が——」

「あーあーあー、その話はループになるからやめろ！」

リクドーは両耳みみを塞ふさごうとして、弓矢ゆみやがあるのでできない。

代わりに響しなめつ面つらになって、

「……俺、本当におまえの主なんだよな？」

まったくウチの子ときたら、どいつもこいつもである。

カロンは答えた。

「リクドー様は間違まちがいなく、我が忠誠の限りを捧げた、剣の神ですとも。ですので、我が忠義に足る主としての振る舞いを、要求させていたください」

口調はバカ丁寧なのに——いや、だからこそ逆に、カロンの物言いはいちいち痼かんに障る。

だがこの忠臣かんげんの諫言かんげんを、リクドーは聞き入れた。

「巫女選定の儀式を始める」

白羽の矢を、おもむろに番える。

未練を振りきるように、弦を強く引いて――

天へと向けて一息で射放つ。

矢は白い光となり、四月の空を一直線に翔けていった。

「お見事です、リクドー様」

カロンが本物の恭しさで、一礼した。

「よせやい」

リクドーは蒼穹に曳かれた、真っ白な矢の軌跡を見上げたまま、ぞんざいにうなずいた。しばし、見つめ続けた。

そんなリクドーへ、頭を上げたカロンがいたわりを込めて言う。

「永遠に少年のままというのも、寂しいものですね」

リクドーは乾き果てた声で答えた。

「もう慣れたよ」

二人で同時に踵を返し、神殿の中へ戻っていく。

「次はどのような巫女様がいらっしやるでしょうな？」

「さあな。蓋を開けてのお楽しみさ」

リクドーは弓持たぬ右肩だけを竦めてみせた。

でも、願わくば――

神であるリクドールは、神様以外の何かに願わずにいられない。

(心も体も靱い少女だったらしい)

いつかは絶対に別れることになるのだとしても、せめて、最後の日が少しでも遠ざかるよう
な、そんな少女でありますようにと、求めずにはいられなかった。

第一章 選ばれた少女

100 YEARS WAR OF THRONES

その少女のフルネームは、腰下まで伸びた彼女の髪同様に、とても長つたらしいものだった。ミリアルージュ・カレンシア・アーダヴァイレルト・エーンケスター。

——というのがそれだ。

細かく意味を見ていくと、「エーンケスター」王国を統治する「アーダヴァイレルト」家の正統で、正妃「カレンシア」の息女である「ミリアルージュ」となる。

つまり、彼女は王女様だった。

（王女様のはずなのよねえ!? しかも第一の!）

生まれてこの方、十六年。もう何度そんな風に、自問しただろうか。

彼女は、王宮の外壁を汚すラクガキを、一生懸命、掃除していた。

別に王家に対する誹謗中傷や、社会的鬱憤うっぶんから出た風刺ふうしの類たぐい、あるいは冒瀆ぼうとく的新思想の自己陶酔けいもう的な啓蒙文けいもうが書かれているわけではない。

今や、そんなことを書いてくれる者すら、王宮なんかには寄りつかない。

近所の悪ガキどもが暇に飽かせて書き殴った、正真正銘のラクガキだ。イタズラだ。

ただ、量が半端はんぱじゃなかったたので、端から端まで消すのが骨だった。水を湛たたえた真鍮しんちゆうのバケツへ、乱暴にモップを突っ込んで、どっこらせー、よっこらせー、と壁の汚れをこすり落とす。

その豪快な仕種しぐさと手慣れ感は、とても深窓の王女様のそれではなかった。

せっかくの愛くるしい顔も、ため息が出るほど美しい光沢を帯びた髪も、台無しも台無し。そもそも彼女は今、ほっかむりをして美貌も髪も隠していた。

服装も汚れていいように、女官たちが着るお仕着せ姿。

朝も早よから精を出していると――

「姫様ー！」

「ミリア様ー！」

大きな呼び声が、正門の方から聞こえた。

城付の兵士たちの声だった。

アーダヴァイレルト王家では、正式な場での名乗りのみ、フルネームを使うのが礼儀作法とされる。普段は愛称を使うし、家臣たちにも呼ばせる。

ゆえにミリアと呼ばれた彼女は、掃除の手を止めずに、声のした方を振り返った。

三人の兵士が、息せき切った様子で走ってくると、

「おやめください、ミリア様！ そのような雑事、わたくしどもがやりますっ！」



「そうです！ オレたち兵士なんて毎日、暇なんですから！」

おろおろとした様子で訴えてくる。

ミリアは彼らの気持ちや誠忠はうれしく思いつつも、

「いいのよ。こんな仕事、それこそあなたたちにはさせられないわ」

一旦、モツプを壁に立てかけ、腰に手をやりながら断言した。

「し、しかし……」

「いいんだってば！ ウチは超貧乏だから、女官も兵士もろくに雇えないわけ」

自分で言ってて嫌になる台詞せりふだが、事実だ。

城で働く全員を合わせても、たったの四十人ぼっち。

百年前なら「そんな王家があるかよ！」と笑い話である。

「なのに城だけはクッソ広いしね。万年、人手不足なんだから、こんな雑事は私がやるわよ。

というか、我が王家に仕えてくれるあんたたちに、こんな雑事はさせられない」

「姫様……っ」

「ミリア様っ」

兵たちは感激しつつも、だがしかしといった様子で、

「お言葉ありがとうございますのですが、わたくしたちが暇なのは事実なんです」

「この国は平和すぎて、兵士の仕事なんてほぼ皆無ですし……」

「だから、ここは我々に任せて……」

「だまらっしゃい！」

今の台詞は聞き捨てならず、ミリアは兵士たちを喝破した。

「あんなたちの仕事は、ラクガキ掃除なんかじゃないわ！ 民の前で威張り腐って、我が王家の権威を高めることでしょ!! わかったらさっさと正門で通行人にガン飛ばしてなさい！」

「ひ、姫え……」

「それはあんまりな仰りおつしやようかとお……」

「しかも権威と仰るならば、第一王女たるミリア様がこんなところでラクガキ掃除をなさるのは、外聞が悪くなりませんか……?」

「だから私、ほつかむりして隠してるでしょ?」

「……」

ミリアの主張を聞いて、兵士たちは一様に押し黙った。

その表情には「全然、隠せてないです」「むしろ城下町中に知れ渡ってます」と書いてあるのだが、ミリアは気づかなかった。

「とにかく、薄給をさらに薄すすくされたくなかつたら回れ右！」

「ははは……これ以上、薄いのは勘弁していただきたくないですな」

「姫様には敵かなわない」

「いや、恐い恐い」

兵士たちはどこか温かみのある苦笑いを浮かべつつ、結局は従ってくれた。

ミリアも安心して、掃除の続きに戻ることができる。

（そうよっ。これ以上、我が王家が舐められて堪るもんですか！）

唇を尖らせ、憎しみすら込めてモップを壁にガシガシやる。

ただし、ラクガキの主への恨みではない。

まあ、少しもないと言えば嘘になるけれど、子どもたちが本当に楽しそうに遊んでいる様が、思い浮かぶようなラクガキなのだ。

正門から南西の角まで五百メートルはある壁を、広々キャンパスに使って絵を描いたら、そりゃ気持ちいいだろう。

問題の根幹は、仮にも王宮の外壁が——王家の権威の象徴が、子どもたちの遊び道具にされていることだ。

アーダヴァイレルト王家の威光が失墜し、民に畏敬されていないということだ。
ゆえにミリアは、その原因を作った連中を憎む！

ミリアが生まれる遙か昔、天から神を自称する生き物たちが降ってきた。

その当時、この南大陸には大小、五十を超える国々が群雄割拠していたというが、その尽くがわずかの間に、神々に屈服させられた。

デナン最大最強のウエスパールアント帝国軍は、内陸部にあるベルベツファー平原に十万の兵を並べ立てたが、雨の神が起こした洪水の中に一瞬で呑み込まれた。

黒炎の神に恭順しなかったホランド王国は、一夜にして都を灼熱地獄に変えられた。その炎は百年経った今でも消えることなく、ホランド王の魂は成仏することもできず、紅蓮に包まれた城下を彷徨い歩き、己の誤った判断を嘆き悲しんでいるという。

神々の力——すなわち《神威》に、対抗できる国や人などこの地上には存在しなかったのだ。タイクーン世界はたった七日で、その様相を一変させた。

人々は国に属し、王に恭順するのではなく。
聖域に属し、神に信仰を捧げるようになった。

では、王家はどうなってしまったのかというところ——

神々は彼らを人類代表と認め、人々を束ねて政を行う機関として、最低限の自治権を認めた。王権神授説を謳う王家は昔から多かつたと聞かすが、まったく皮肉なことに、それが最悪の形で現実となったのだ。

そう、最悪である。

神々は王家から、税を徴収する権利だけは奪った。

それらは代わりに神殿へ、喜捨として収められることになった。

そして、その中から雀の涙ほどの金額を、王家に運営費として「神授」されるのだ。

下世話な話、唸るような金がなくては、権力など実態を伴わない。軍隊ですらもう維持・営
営できないのだから、恐くもなんともない。

結果として——あらゆる王家は形骸化した。

ほとんど名ばかりの存在となつて、毎年「神授」されるお金を這いつくばって頂戴し、それ
をやりくりして生き永らえているというのが現状である。

民にもその実情はバレツバレだから、

「なんかエラソーにしてるけど、ぶっちゃけ空気だよね」

「わかる。いてもいなくても関係ないよね」

「え、でも、私がしつこいナンパで困つてたら、兵士さんが守ってくれたし、助かったかな」

「まちで？　ウチが泥棒に入られた時は、捕まえるまでどれだけ時間かかってんのよって……」

「まあ、たまには頼りになるけど、頼りにならない時も多いって感じよね」

「本当に困った時は、神殿に駆け込むよね」

「まちそれ」

みたいな感じに思われている。

ミリアの生まれたアーダヴァイレルト王家もまた、その例外ではなかった。極貧で、民からもミジンコみたいに使われていた。

（私だって！ 私だって！ あと二百年早く生まれてたら、蝶よ花よと育てられてたし、たっくさんの女官に傳かたかされてたし、好きなおめかしして、好きなお菓子食べて、毎日なに不自由なく暮らせていたのよ！ こんな重いモップ持ってラクガキ掃除なんてしなかったのよ!! ああもう全部、神々あいつらのせいっ!!）

恨みつらみを原動力に、ミリアはせえはあ言いながら掃除を終える。

こんな情けなくなるような重労働でも、やり遂げればそこはかとなない達成感があるもので、額の汗を拭ぬぐいっつ、イイ顔をして王宮に帰る。

町のと真ん中にある平城ひらしろだ。

正門を抜け、往時は閱兵場も兼ねたという前庭を通った先に、城の正面玄関がある。

扉は縦五メートル、両開きで分厚い、威圧的なもの。

だが、もう長いこと建て付けが悪くなったまま修繕もできず、開閉が大変だということで、常時開けっぴろげになっていた。

どうせ金目のものなんて、この百年の間にあらかた売っ払ってしまったので、泥棒だつてこんな貧乏城を狙いはしない。

内装だつてあちこち痛んでいるが、修繕するお金はないし。

女官たちの手が回つてないから、無駄に三つもある中庭なんて、雑草が生え放題だし。

これってなんとかして美味しく料理できないの？ そしたら食費が浮くじゃない——なんて、ミリアは本気で周りに諮問したことがあるし。

「ハァ、ため息しか出ないわ。逆さに振つても銅貨一枚出ないわ」

御伽噺に出てくるような「お姫様」のイメージを、真つ向から打ち壊しにかかる台詞を吐きつつ、城の厨房に向かう。

盛時には毎晩の如く晩餐会を開いていたと伝え聞くし、厨房もそれを支えられるだけの巨大なもののだが、今はもうその広さがかえて虚しくなるほど、閑散としていた。

テーブルがいくつか置いてあつて、そこで作ったものをすぐ食べられるようにしてある。

ミリアももうメンドイし、無駄に他の部屋を使うと床がすり減るし、家具も傷むので、食事は毎日ここで済ませている。

使用人たちと一緒になつても別に気にならない。

というか、和氣藹々として楽しい。

「ハァ、お腹空いた」

食べ盛りの年頃の、女子の本音を盛大に眩くらきながら厨房に入る。

すると、中に妹がいた。テーブルの端にちよこんと座って待っていた。

ミリアより三つ年下の十三歳で、面影はよく似ている。ただ、髪は妹の方が短い。

名前はフィーネリーア。愛称はフィーナ。

ちなみにミリアの家族構成——というかこの城に住んでいる王族——は、病弱で政治の一线から退いている父国王と、平民上がりでガサツだけど夫を溺愛する正妃の母、それにこの妹を合わせた四人となっている。

「あんだ、まだ食べてないの？ さっさと準備して、先生ンところに行きなさいな」

ミリアは説教顔でフィーナに論ず。

「あたしだってお腹、空いたもん。でも、トリモンが風邪かぜで休んでるの。それで姉様を待ってたのよ」

最近ますますこまっしやくれてきた妹が、したり顔で反論してきた。

「……まあ、それならしょうがないわね」

トリモンは城の厨房を一手に取り仕切る料理人だ（というか二人雇う余裕がない）。

他の女官たちも料理はできるが、午前の仕事でいっぱいいっぱい。手隙てすきになるのを待っているら、それこそお昼が来てしまっ。

「じゃあ、私が作ってあげるけど、文句言わずに食べるのよ？」

「はい」

返事だけはいいフィーナを尻目しりめに、ミリアは竈かまどの前に立った。五徳の上にフライパンを置く。

一方、竈の中には薪まきや炭の用意もない。完全に空っぽだった。ミリアは慣れたもので、右の人差し指を一本立てる。

そこには銀製の指輪がはまっている。

デザインは素っ気ないものだが、窓から差し込む朝日を受けて、神秘的な光沢を放っていた。タイクーンの人々が、今や誰だれでも身に着けている装飾品だ。

その指で、ミリアは火の印字を切る。

同時に強くイメージする。

たったそれだけの簡単な行為で——竈の中が発火した。

薪や炭といった燃料を一切使わず、ひどく安定した火力をフライパンにもたらしてくれた。まさしく魔法の如しであった。

神々は巫女みこを通して、《龍脈》から莫大ばくだいな地素ガイアを得るのだという。

だが、戦時以外は特に必要のないものなので、薄めて周囲に発散する。しかもこれが、聖域サンクチュアリ 一帯に行き届くほどのエネルギーになる。

それを指輪が受け止め、使用者の意思に^{こた}応えて、ささやかな魔法めいた力を発現するという仕組みだった。

ミアも他の誰も、詳しい原理を知ってはいないが、便利に使っている。

部屋の中を明るくする。湯を沸かす。暑さ、寒さを緩和する。風邪の症状を軽くする。などなど、生活に密接した様々な使い方ができるのだ。

指輪の効力は一年しか保た^もず、人々は毎年、神殿に納税——もとい喜捨へ行つて、新しいものをもらつて帰る決まりになっている。

神々やその眷属^{ガーズ}たちは、「聖なる指輪」だとか「幸せの指輪」だとか呼んでいる。

実際、この指輪なしにはもう、タイクーンの人々は生きていけないだろう。

神々が特に信仰を強要せずとも、人々が勝手に彼らを崇敬するのは、これが理由だ。これほど実感を伴う現世利益もないだろう。

ミアはフライパンを火にかけたまま、貯蔵庫^{あき}を漁った。

中に収められた食材は全て、やはり指輪の力で、新鮮な状態のまま保たれている。

ミアは豚肉といくつかの野菜を取り出す。それから瓶^{びん}に溜^たまった水を鍋^{すく}に掬い、指輪の力で清潔に変えてから、食材を洗う。

「姉様って普段、神様のことが憎い憎いって言ってるけど、これでもかかってくらい指輪の力を

使い倒してるよね……」

「悪い？ 私はもらえるものは銅貨一枚だってもらうし、借りられるものは猫の手だって借りる主義なの」

「悪くはないよ。業突く張りってか、逞たくましいなって思うけど」

「将来、この国を立派に治める、女王の器って言って頂戴」

「すぐ自分をいい方に言ってアピールするのも、王族向きの性格だよね……」

フィーナは呆れ顔になったが、背を向けているミリアには見えない。

軽口を応酬している間にも、ミリアは包丁で食材を豪快に切って、適当にフライパンへ放り込んで、炒め始めた。そのフライパンさばきはまさに大胆そのものだった。

「お姉ちゃんて、見た目だけは美少女なのにね……」

姉の凄まじい料理姿を見て、フィーナが嘆息した。

「ん？ よく聞こえなかったけど、フィーナは朝ご飯要らないって？」

「中身はもはや聖女って言ったの！」

「何よ、この子ったら。お世辞なんて覚えてやあねえ。ヲホホホホ」

「ハア……」

ミリアの上機嫌な笑い声の中に、フィーナの新たな嘆息がこっそり消えた。

「はい、できたわよ。しっかり食べていきなさい」

ミリアは豚肉と野菜を塩コショウで炒めただけの、豪快な料理を皿に盛って出してやる。しかし、フィーナは物言いたげな視線を落とすばかりで、手を付けようとしなない。

「何よ？」

「……女の子の朝食って感じじゃないよね、コレ」

「まああんたは！ だから、文句言うなって最初に釘差したのにつ」

ミリアは目を尖らせた。

「いーい？ このブタさんも！ キヤベツさんも！ ニンジンさんも！ 大昔、うちの王家に世話になったからって、未だに恩に思ってくれる感心な農家さんが、届けてくれたものなのよ？ それに文句つけたらあんた、餓死する呪いがかかるわよっ」

「食材じゃなくて、調理法に文句言ってるのになあ……」

まあいいわよ、みたいな渋々態度でフィーナは皿にフォークを伸ばした。

「あたしも料理できるように、練習しようかなあ……」

「あんたはそんなことしないでいいの。私と違って頭がいいんだから。先生ンとこでみっちり勉強して、将来の私を支える名臣になってくれなきゃ」

「ハイハイ姉様のためにね」

フィーナは嫌み口調で言ったが、結局、気づけばぺろっと平らげていた。

こいつだって食べ盛りの年頃なのだ。

フィーナは、皿は自分で洗おうとした。

「それも私がやとくから。あんたは早く行きなさいってば」

「姉様ってホントは優しいよね。世話焼きっていうか」

「ハア？ 回り回って私自身のためよ。あんたがさっき言ったばかりでしょ？」

ミリアは取り合わず、自分の皿を平らげるのに忙しかった。

我ながら塩加減が絶妙！ と悦に入っている。

「じゃあ、行つてきまーす」

フィーナはそう言ったが、なぜか突っ立ったまま、窓の外をしげしげと見ていた。

この厨房は、中庭の一つにつながっている。

「光輝満つる園」という大仰な名で、百年前には盛んに園遊会だの晩餐会だのが開かれていたと、亡き祖父が言っていた。

しかし今は、一面の雑草で覆われるばかり。

どれも丈が高く、しかも強靱無比で、あたかも人の進入を拒んでいるかのよう。

それらを見回してか、フィーナがコメントする。

「雑草、また伸びたねー」

「春だもの、そりゃ伸びるでしょ」

「冬の間には抜かなくてよかったの？」

「手が回らなかったのよ！ どうせもう誰も使やしないだし、放置よ放置」

「でも、外の壁にラクガキされたら、必死で消してるじゃない」

「あそこは民の目につくんだから当然でしょうがっ。無様なトコは見せらんないわよっ」
同様の理屈で、前庭だけはしつかり芝生も整え、手入れをしていたり。

「でも、王宮の奥なんて誰も入ってこないんだから、汚城おしろになってようが汚庭おにわになってようが、一向に構やしないわよ！」

「姉様って見栄っ張りだよねー……」

「私はそんな低次元の話をしてんじゃない！」

ミリアは食事を中断し、居住まいさえ正して懇々と論じた。

「あんたはイマイチわかってないようだから、はつきりと言うわよ？」

私はもうこれ以上、このアーダヴァイレルト家が舐められるのは、ガマンならないの。

そして、この私の代のうちに、必ず王家の権威を復活させる！

それがこの私に、ご先祖様たちが与えた使命よ」

エーンケスターは小国である。

町の数もこの王都を合わせ、たった四つしかない。

それでも、とても栄えた土地だった。

そもそもが中央大陸アルルカーンからの玄関口になる交易の要衝だし、都の周りは森林資源が豊かだし、ポラリス沃野よくやが実らせる農作物と、タタン鉱床を中心とする重工業、さらにはヴェステルの温泉街で活発な観光業が、国土面積以上の繁栄を王家にもたらしてくれた。

代々の王もまた、善政を敷いてさらに国と民を富ませ、周辺諸国には毅然きぜんとにらみを利かせ、侵略など許さなかった。

ミリアとフィーナにも、そんな賢王たちの血が流れているのだ。

彼らの裔すえとして、アーダヴァイレルト王家を盛時の姿に戻すのは義務であり、決して不可能ではないはずだ！

果たして、フィーナは答えた。

「うん……私だってわかってるよ、姉様。だから、いくらでも協力するつもりだし——」

そう言ってくれつつも、この賢明な妹は、やはり窓の外へ視線を向けたままだった。
物憂げな横顔のままだった。

「でも、姉様？　じゃあ……あれはいいの？　許していいの？」

窓から中庭を指すフィーナ。

さつきからいっただいなんだというのか？　いっただいそこに何があるというのか？

ミリアは席を立つと、己の目で確認した。
伸び放題の、丈の高い雑草の陰で――

近所の悪ガキどもが、かくれんぼしていた。

「くおらああああああああああああああああああ!!」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアッ、ほっかむり姫が出たああああああああああ!!」

「逃げろ！ 食われるぞ！」

「どうあれが、ほっかむり姫よ！ あと『狼おおかみが出た！』みたいなノリで言うな！」

ミリアはもう勝手口から飛び出すと、悪ガキどもを追い回したのだった。

十

――という大騒動の後である。

「ホントにやんなっちゃうわ。あいつら、王宮を遊び場だと勘違いしてんのかしら？ まあ、汚城おしろに汚庭おにわじゃしょうがないけど！」

ミリアはブツクサこぼしながら、三階にある自分の部屋に帰った。

この城は数百年前に、伝説の開祖ランベシー・アーダヴァイレルトが造らせたものだから、建物自体は立派である。

古黴^{かび}でいて、くたびれたまま修繕できてないけれど、まあ味よ、味。

従ってミリアの自室も、王女の部屋に相應^{ふさわ}しい広さを持つ。庶民の家ならば、一軒分くらいは余裕であるだろう。

調度品だって安物に入れ替えられてはいるが、一通りはそろっている。

ミリアはこの後、公務があり、着替えのために戻ったのだが、

「……ナニコレ？」

部屋の中に入ってびっくり。

床に矢がぶつすり刺さっているのである。

矢羽がいつそ神々しいほどに真つ白だった。

思わず窓を確かめるミリア。

起床後、一度開けるも、出る前にちゃんと閉めていったはずの木戸は、そのままだった。

だったらこの矢は、どこから飛んできたのか？

しゃがみ込んで、矯^ためつ眇^{すが}めつ眺める。

「まさか、あいつらの仕業!？」

脳裏に浮かんだのは、さつき散々に追い回した悪ガキども。

「イタズラにしても物騒ね！ しかも乙女おとめの部屋にまで侵入して！ 今度会ったら、もう二度とできないくらい、とつちめてやらなきやつ」

ミリアは鼻息荒く、ふんずと床から矢を引き抜くと、怒りに任せてベキベキに折って、ゴミ箱へ思クソ叩たたき込んだ。

それから着替えて、何事もなかったかのように謁見えっけんの間へ向かう。

病床の父王に代わって、民の陳情を聞いてやるのだ。

彼らはこのご時世でもまだ、王家の権威を認め、助力をすがる殊勝な者たちである。

無下にするわけにはいかない。

それに、こういった日々の地道な活動によって、評判が評判を呼んで、いつかは王権復古に繋つながると信じている。

女官のお仕着せのままでは舐められるから、一張羅のドレスでバッチリ着飾った。

ほっかむりも取り払った。

「いざ出陣！」

自室の出入り口の扉を、勢いよく開けるミリア。

勇ましく一步を踏み出そうとして——また妙なものを見つけた。

「んんんっ？？？？」

部屋の真ん前、廊下の床に白羽の矢が、ぶっすり刺さっていたのである。

「さっきまでこんななかったわよ!？」

怪訝けげんそうにしつつも、また怒りに任せて引き抜き、ベキ折って捨てる。

「こう執拗しつぎょうで悪質だと、イタズラの範疇はんちゆうを超えてんじゃないのよ!」
憤懣ふんまんやる方なかったが、謁見の時間が押していた。

イタズラの犯人探しと成敗は後回しにして、廊下をドストドス歩いていく。

しかし、角を曲がった先で、またも白羽の矢が壁に刺さっていた。

「邪魔よ!」

ミアは一瞬の力技で抜き捨て、先を急ぐ。

しかし、また廊下の角を曲がると、床に矢が。

その先にも天井てんじやうに矢が……。

「いい加減にしろー!」

行く先々にぶっ刺さっている矢を、ミアはちぎっては投げ、ちぎっては投げして進む。

そして、廻り階段にたどり着くと――

数えきれないほどの矢が、踏板という踏板に刺さっていた。

「ぬわあああああああああああああああああああああああつ」

ミリアは憤怒で声にならない絶叫を上げると、もはや鬼神もかくやに矢を抜きまくった。

「ぜい……ぜい……」

ミリアは肩で息をしながら、謁見の間に到着する。

恐る恐る中を覗くと、もう矢は刺さっていないかった。

(ホントに!? ホントに!?)

疑心暗鬼に駆られ、神経質なまでにあちこちを見回すが、一本も確認できない。

ホッと胸を撫で下ろすと、ようやくいつもの調子を取り戻した。

「ごめんなさい、ちよつと遅れたわ」

謝罪とともに入室し、ミリアは玉座にふんぞり返る。

この豪華な椅子だけは売り払わずにとつてあるし、謁見の間と、正面玄関からここまで続く廊下だけは、内装の手入れと修繕を完璧にしてある。

フィーナが言うところの、「見栄っ張りの極致」みたいなゾーンである。

隣には、今やこの国で唯一の大臣が立つ。

父国王の親友で、同い年の四十三歳。

有能なのに友情価格で働いてくれる、ミリアにとつても恩人だ。

「今日の陳情は三組『だけ』です、姫」

「なるほど、三組『も』我が王家に助けを求めてる民がいるわけね！」

「……最初のひとりに入ってもらいましょう」

「いいわ、じゃんじゃん持ってきなさい！ 特別に会ってあげる」

ドヤ顔でうなずくミリア。

出入り口に立っていた二人の儀仗兵が、鍛えられた喉のどで口上を述べる。

「国王陛下御代理ミリア王女殿下、ご謁見~~~~ッ！」

それから二人で建て付けの悪い両開きの大扉を、必死こいて———だけど澄まし顔で隠して

———ゆっくりと開けていった。

最初のひとりが姿を見せる。

「むっ」

とミリアは目をみは瞠る。

同い年くらいの少年だった。しかもかなりの美形。

ただ、表情がなんとというか……くたびれたオッサンみたいなけだる気怠い感じなのだ。

(ただもの只者じゃあないわね)

そのチグハグな印象に、ミリアは確信めいたものを抱いた。

父に代わり、謁見を始めてもう二年。

その間に様々な人種、職種の者たちと会い、言葉を交わし、人を観る目は肥えたという自負

が、ミリアにはある。

「ようこそいらつしゃいました——」

ミリアは相手がたとえ王侯でも失礼がないような、最敬礼を以って会釈をした。

「——父の代理を務めております、この国の第一王女。ミリアルージュ・カレンシア・アーダヴァイレルト・エーンケスターですわ。どうぞ、お見知りおきを」

フィーナが見ていたら、鳥肌を立てるだろうくらいの猫を被る。

平民上がりの母親の影響で、普段は町娘みたいな言葉遣いをしている（あと、態度も）ミリアだが、その気になればいくらでも王女然と振る舞えるのだ。

教育を受けていたのだ。

すると、少年も受け答えした。

こつちが最敬礼をしてやったのに、あつちは無礼スレスレのざつくばらんさで、

「よお、初めまして。俺の名前はリクドー。知ってると思うけど一応、神の端くれだ」

「出てけっ」

ミリアは一切の逡巡なく、出入り口を全力で指した。

いきなりのことに、リクドーと名乗った少年は目を丸くしていたが、知ったことではない。

(よりもよってこのあたしの前に？ 神を自称する生物が出てくるとか？ いい度胸じゃないのよ、コノヤロ〜〜〜ツ)

積もりに積もった怨念のあまりに、瞳孔が開ききったような異様な目付きをしてしまう。

呪詛じゆそのような眼差まなざしを浴びせまくってしまふ。

それでリクドーとやらはたじたじになりつつも、

「あ、いや、出てくわけにはいかねえんだよ」

などと、来意の説明を始めた。

「新たなヴェステルの巫女を迎えに来たんだよ。信じられねえかもしれないけど——ミリアルーージュ姫。あんたがその巫女に選ばれたんだ。この矢に見覚えがあるだろ？」

などと、いきなり白羽の矢を取り出してみせた。

「あれ、あんたのイタズラだったの!？」

ミリアはもう怒りのあまり、前のめりになって腰を浮かしてしまふ。

「え？ いや、別にイタズラってわけじゃ——」

「出ていって」

ミリアは同じ言葉を、今度は冷ややかに言い放った。

リクドーが「そんなバカな」とアホ口を開けていたが、一切の斟酌しんしやくはなく、氷の笑顔でお引き取り願ったのである。